

親類の土蔵に仮家として住んでいて、私は命拾いして命からがら帰還したのに住む家がなく、焼け野原に立たされたのには再度驚いた。しかしこのときも、この淋しき、哀しきは忘れて、人生の再出発とそのときに決めたのであった。幸い、近くに私の母の実家があり、叔父もおられたので、そのとき住宅建築の準備ができ上がりつつあって、当月二十七日には棟上げをさせていただいた。

入隊前に県警察職在籍のまま入隊し、敗戦後引き続き抑留生活と短年の間の出来事だったが、警察官も辞退し、以来家業を継いでいる。今現在、戦後五十余年を生き抜いた経験を大いに生かし、今後の余生を有意義に過ごしたいと思っている。

招かざる宿命

福井県 大谷 小之吉

終戦のとき一番若かった(当時の初年兵)者が、も

はや八十歳に近づき、寄る年波には勝てず、入退院の繰り返しや、健康であっても老いの身は心身共に脆く、戦友会や抑留会の案内状が折角来ても県外の場合、足踏みとなる有様、実に嘆かわしい。思うに青春時代、北滿の軍隊生活は我等戦友の最高の思い出であり、またソ連抑留中の辛酸は、その体験者が生死の極限を乗り越えて帰還できた喜びと、また、一緒に帰れず異国の土となった同胞には、深甚なる哀悼の意を捧げたい。

さて、私が特に印象に残っている思い出を記してみよう。

昭和二十年九月十五日、私たちも黒龍江を渡河し北へ北へと徒歩で進む。一週間を過ぎたころコルホーズ(集団農場)で馬鈴薯の収穫をさせられつつ、ライチハ收容所に着く。どこの收容所も同じだったろうが、昭和二十年の越冬が一番厳しかった。被服が悪いので寒さが骨身に凍みる。

食糧が乏しく、そのうえ雑穀等は精白されないまま

支給された。労働は強制（ノルマ適用）で重労働。環境が悪い。着の身着のままの生活。生死限界の日々が続いた。終戦時六十キロだった体重も三十七キロまで落ち込んだ。これ以上耐えられない身体、本当に骨と皮、肋骨は洗濯板よりも酷く瘦せている。この調子だといつ息を引き取っても不思議でない姿となってしまう。それでも炭鉱作業には出された。情ない、泣くにも泣けない。皆が等しい体力、これがその当時の関東軍の哀れな姿……。

それは昭和二十三年五月中ごろであった。夕食後、ソ連の当局から「馬に乗れる者がおるか」。用件としては、明日隣分所へピラカンの製材所で製作した箱物の帰国（ダモイ）用の便器を馬車で輸送する、人員は三人、と。「隣分所、そして帰国」誰しも行きたいと言う声、しかし馬に乗ることに皆はちょっと躊躇した。私は初年兵のとき、義勇隊出身者の命知らずの若者。「馬ぐらい、猫の子扱いする」と裸馬を跳ばした経験がある。昔取った杵柄じゃないが、「よっしゃ私、行きます」と名乗り出た。すると私も私もと三人と

なった。翌日早い昼食を終えて指示された厩舎へ行った。中に十頭の馬がいた。歩哨が「好きな馬を取り出して、隣の小屋の中にある鞍を着けて、荷馬車も繋いで待っている」と言う。さて試運転、これじゃ馬に乗るのでなくて荷馬車に乗るんだ。また、この二輪車は鉄の輪でできていて、進むときは小石を踏み潰す音でとても賑やかであった。製材所の一角に真新しい大小の便器が積まれてあった。それを三等分して積み込んだ。その積み荷の上に腰を下ろして馬の手綱を取って進んだ。道案内として先頭車に歩哨が乗り、私は一番後方の車に乗った。製材所を出て東方へ東方へと進んだ。そして今度は山を登り始めた。二キロほど進むと北の方へ左折。前進方向の景色は、右手は山担ぎで、左は急な断崖絶壁となっていた。両方とも雑木林で白樺が大半を占めていた。その下草はシベリア特有のスズランが密集して、その容姿や天然の香り、自然の美しさは最高である。静かな山道、緩やかなカーブの多い登り坂、馬車と馬車の間隔を余り開けないようにして進んだ。

道路も急斜面や平坦が交互にあって、次第次第に高く登って行く。五月の若葉の萌えるような草木林の中を潜るように、荷馬車に乗って揺られ揺られて進むことはとても楽しいものであった。

製材所を出てから一時間と三十分くらいは過ぎただろう、この辺が峠だろうか、平坦な道がしばらく続いた。しかし、進行方向に向かって右手の山の頂上は二十メートルくらいはあったが、車道はこころ辺りが頂上だった。歩哨は、ここで休憩せよと言って煙草を出して渡してくれた。そして、これから先は下り坂だから、馬の鞍帯を締め直して進むようと言った。私たちは歩哨の言う通り、やや強めに締めた。そして周りを眺めた。海拔にして五百メートルくらいはあるだろう。ここまでの登り坂道はカーブも沢山あったが、比較的緩やかだった。これから先の下り坂道は急な箇所もあるとのこと、車間距離を十分隔てて出るようにした。上り坂での自分の位置は、荷台の上とはいえそれほどとは思わなかったが、下り坂での位置は馬の鞍の位置よりも六十センチ余り荷物は高く、その上に腰

を下ろすと足の位置は馬の尻よりも高く、坂が急になればなるほど高く、右手の山を見ればそれほどないが、左手は数百メートルの断崖絶壁、足の裏がこそばゆく、身の毛のよだつ思いだった。

下り坂の出発初めは静かに歩んでくれた。この馬が、先頭の一、二番の馬が右折して見えなくなった途端、急に走り出した。さあ大変なことになった、この坂はまるで手の平を立てたような急斜面。自分が直接乗馬しているなら止める方法もあるが、荷台の上じゃ手も足も出ない。だんだんと加速がつく。何とか止めようと乗馬時のように思い切り手綱を引き締めた。何を勘違いしたか馬は一足飛びに走り出した。鉄車輪の音が大きくなればなるほど怯えてもう止まらない。また止めようもない。この急斜面を矢のように跳んで行く。こうなると自分の身の危険を感じ、飛び降りる以外はない。右側の山の方に飛ぶことを決死で決めたが、白樺林で空き地がない。左の方は数百メートルの断崖、目の玉は右、左、右、左と必死で探し求めた。そのとき、右手に白樺林の間に僅か一坪（三・三平方

メートル)ほどの草地を見つけた。即座に飛び伏せた。横の距離は二メートル余りだったので、躊躇したが無事飛べてほっとしたのも束の間、自分の責任、馬と積み荷の安全確保、飛び降りた道路は山肌より二メートルは低いが、滑り降りて馬を追いかけた。荷台の後ろ姿は見えだが、右折したと思つた途端ミキミキ、バリバリ、ドカンと大音響がした。「しまった」と思いつつ一生懸命後を追つた。右折してびっくり、道路には馬も荷もなく、左斜面の雑木林は薙ぎ倒されている。あの勢いでカーブを回り切れず、荷車の重みに振り回されて吹き飛んだのだろう、馬は三十メートルほど下の白樺の木にもたれて四本足を高く上げてゐる。車は分解され、積み荷の便器は三々五々散らばつて壊れ、全く使用不能の状態となつていた。私は思案にくれていた。そのとき、前車の二人と歩哨がやつて来た。私はこんな訳だと話したら、歩哨は、やつぱり距離が開くとこの馬は跳ぶ癖がある、またやつたかと笑つていた。済んだことは仕方がない、私に怪我がなくて何よりだと慰めてくれた。

さて、少しでも早く器具を道路上まで上げることが先決だ。そのころ歩哨は帯剣を腰から抜いて白樺の木を切り、その板で馬の尻を嫌と言うほど殴りつけた。「ヨッポイマーチ、ヨッポイマーチ(馬鹿野郎)」しかし馬は完全にダウンしている。よほど速い回転で跳び落ちたのであろう。

歩哨は今度は馬草入れの容器を下げて、谷間まで降りて水を汲んで来た。そして馬の顔にぶちかけた。すると、ヒヒンと一鳴きした途端、くるくると目玉を回して飛び起きた。馬の手綱を近くの白樺の木につなぎ、それから車輪を探し始めた。私たちは木製品を一つずつ肩に背負つて道端まで運び出した。

左車輪と荷台は馬の近くにあつたが、右車輪はそれよりさらに二十メートルほど下の白樺の根元に掛かつていた。いかに右折時の回転、もんどりの凄かつたかを感じさせられた。装具を全部引き揚げ終わるまで三時間余りを費やした。今度は荷車の組み立て、なくなった車軸は白樺の木を切つて代用とした。ようやく出発となった。私は丁寧に敬礼を申し上げた。同志た

ちは「なんのなんの、怪我がなくて何よりだ」。また歩哨はにっこり笑っていた。もしあのとき、飛ばずに荷馬車に乗ったままだったら、おそらく右折のカーブで宙に飛ばされて、どんな姿で……と思うと、ぞっとした。

今度は私の荷馬車に歩哨が乗り込んだ。道路は一本道だから前進せよと指示していた。鉄車輪の回る度にきしる音の賑やかさ。右折したり左折したり、幾重にも回りつつ下りて行く。山裾の谷間で浅い小川のような所を渡るころ日は暮れて、はるか向こうの方に電灯が見えた。そこが目的の収容所だった。歩哨がこの収容所の歩哨と会い、何やら喋っていた。荷物はこの収容所の人たちが取りに来た。使役に出されたと言い、不愉快な顔だったが、帰国（ダモイ）用の便器と聞いて一変して笑顔に変わった。恐らく今夜のうちに皆に知れ渡り、さぞや楽しい夢を見るだろう。

私たちはその間、この分所で夕食をいただき、馬には干し草を与えてくれていたようだ。任務を終えてここを出たのは九時過ぎだった。

【執筆者の紹介】

天谷さんとの出会いは、昭和五十二年ごろだった。北陸環璣会の戦友会会のとき、日ソ開戦の話が出た。私は歩兵砲の六中隊、天谷さんは三中隊の鄭彈筒。中隊は別々だったが、戦闘では環璣会地北鎮台の南丘、陣地も同じ、しかもお互いが近くに陣取って共に戦っていました。宴会で初めてそのことがわかった。それ以来の交際です。

また、天谷さんの抑留地はライイチハ収容所で、ハバロフスタ近郊だったからラーゲル内の設備等もよかったですようですが、私の場合はブラゴエの収容所で、発疹チフス、栄養失調等で大変苦労しました。

天谷さんは、全抑協福井県連結時の発起人代表者です。昭和五十五年八月二十三日、結成大会を成功させ、その後ずっと、事務局、会計を担当してもらっています。私は副会長を務めて、お互いが助け合っています。

（福井県 林 俊男）